

## ジョルジュ・バタイユの視角からとらえたスポーツ・レクリエーション

東京家政学院大学

芳賀 健治

キーワード

過剰、消費、遊び、「聖なる部分」

### 1 研究の目的及び視角

今日、スポーツ・レクリエーションは健康に役立つもの、明日の労働の活力をもたらすもの、教育的機能を果たすものとして一般に認識されている。また、スポーツは遊びであると基本的に認識されている。しかしながら、文化人類学的な視野から人間の遊びに目を向けてみると先に述べた有用性という側面よりもむしろ非生産的、浪費的とも思われるような考え方に基いた遊び行動が数多く目につく。また、今日のスポーツ状況においても、有用性という観点からは理解し得ない状況が数多く見受けられる。

このような経緯から、これまでのスポーツ・レクリエーションのとらえ方が生産＝有用性という観点にのみとらわれているのではないかという疑念を持つに至った。このような視点としては、アンジェイ・ヴォールが「近代スポーツの社会史——ブルジョワ・スポーツの社会的・歴史的基礎——」において、スポーツの社会安定化・保守的機能として説明している。しかし、このような機能は、バタイユの視角からとらえるならば、一部の社会には当てはまるが、別の社会には当てはまらないという結論が導き出せる。前近代の身体運動文化を含めて広義にスポーツ・レクリエーションをとらえるならば、このような機能はむしろ特殊なものとしてとらえることができる。

ジョルジュ・バタイユ(Georges Bataille、1897～1962)は、フランス文学者であり社会学者であるが、彼の論述は近代社会を至上として見る社会科学の通念に挑戦しているように思われる。本論で注目した「呪われた部分」における経済理論は、文化人類学的なアプローチによって人間の経済活動を把握したものとしてとらえることができる。栗本慎一郎の経済人類学の理論体系も、バタイユの影響を強く受けている。(1)

バタイユの基本的命題は次の一文によって紹介できよう。

「初歩的な事実から出発しよう。生命体は、地表のエネルギーの働きが決める状況の中で原則としてその生命の維持に要する以上のエネルギーを受け取る。過剰エネルギー(富)は一つの組織(例えば一個の有機体)の成長に利用される。もしもその組織がそれ以上に成長しえないか、或いは剰余の成長のうちにことごとく摂取されえないなら、当然それを利潤ぬきで損耗せねばならない。好むと好まざるとにかかわらず、華々しいかたちで、さもなくば破滅的な方法でそれを消費せねばならない。」(2)

バタイユは人間存在の根本原理を「過剰なるものの蕩尽」と見たのであり、「富の一部が、概算して、損失に、或いは、利益の見込みのない、非生産的使用に捧げられている」(3)という強い確信こそ彼の論理の基調を成すものである。非生産的価値の追求こそ人間が「聖なる部分」に接する文化形態となっていること、そしてその究極には象徴としての〈死〉が存在することをバタイユは鋭く指摘した。

しかし現実には貧困や飢餓が数限りなく存在し、現在も存在している。このことについてバタイユは「個的観点から出発すれば、問題は第一に資源不足によって提起される。もしも普遍的観点から出発するならば、問題は第一に資源過剰によって提起される。恐らくいずれにせよ貧困の問題は存続するだろう」(4)と述べている。社会全体としてみるなら、一部に飢えに苦しむ農民が存在する一方で、貴族や神官などによって(富)が蕩尽されていた。つまり、農民の生産的労働は、過剰をより過剰にするものであり、貴族らの「非生産的労働」によって過剰なるものが蕩尽されると彼はとらえていた。

過剰の消費形態が様々な社会の性格を決定づける要因であることを、バタイユは、チベットのラマ教社会などを通じて説明しているが、このような視角に基づけば、今日の先進国社会は、この剰余の一部が余暇生活あるいはオリンピック、プロスポーツといった形態によって大規模に消費される社会として性格づけることが可能であるように思われる。

本論は、1949年発刊の「呪われた部分」と1946年6月から1959年9月までの間に発表された論文を

まとめた社会科学論集・第2巻「神秘／芸術／科学」<sup>(5)</sup>の論述を基礎に、今日のスポーツ・レクリエーションの現象を再検討してみようとするものである。バタイユの視角は、今日の社会通念にとらわれることなく、広く人間にとって遊びとは何かということを示唆してくれるように思われる。

## 2. バタイユの視角からとらえた近代スポーツ

近代スポーツ成立の土壌となったブルジョア社会について、バタイユは、古代社会の多くが富（剰余）を蕩尽的な文化形態に振り向けたのに対し、ブルジョア社会とは、富（剰余）を蓄積し、成長に振り向けた社会であり、「消費への憎悪がブルジョアの存在理由であり、正当化である。同時にその恐るべき偽善の原理である。」<sup>(6)</sup>と述べている。

バタイユ的視角から近代スポーツを把握するならば次のような論理が可能となろう。すなわち、ブルジョワ社会においてスポーツが重要な意味を持つに至ったのは、スポーツがブルジョアの有用性という観念から把握することが可能な特性を備えていたからであろう。すなわち資本主義体制にとって不可欠の労働力の質・量の両側面における確保、軍事力の確保におけるスポーツ・体育の有用性が認識されたからにほかならない。

バタイユの視角からとらえるならば、スポーツはその本質において消費的・蕩尽的なものである。近代スポーツの成立とは、有用性＝生産的価値といった側面からブルジョワ社会にスポーツが受け入れられることによって、本来の消費的・蕩尽的機能が大きく後退した転換期と見ることができよう。近代スポーツの成立期、パブリックスクールにおいて当初フットボールが禁止されたことはブルジョア社会の論理において当然のことであった。マッキントッシュは、「ビューリタンによる非難をまきおこしたのはスポーツ活動そのものではなく、スポーツを、その実利性をかえりみないで、単に身体活動における楽しみや喜びのためだけの機会と考える態度であった」<sup>(7)</sup>と述べ、近代スポーツがいかに有用性という価値判断に基いたものであるかを対照的に示している。今日、スポーツは労働の世界と構造的にも機能的にも正確に対応しているとの認識があるが<sup>(8)</sup>、そのことは少なくとも近代スポーツについてしか当てはまらないように思われる。バタイユの視角からみれば、スポーツの普遍的性格は、むしろ実利性をかえりみない非生産的価値にあるととらえることができる。<sup>(9)</sup>

バタイユは、「今日、非生産的消費の自由かつ大規模な公共的形態は消滅した」<sup>(10)</sup>と述べているが、現在のオリンピックの状況や、ミッチェナーの「スポーツの危機」<sup>(11)</sup>にみられる批判の中に、この「非生産的消費の公共的形態」が古代社会ほどではないにしろ復活しつつあるようにも思われる。以上を整理したのが表Iである。

表I スポーツの基本的性格の相違

	前近代のスポーツ	近代スポーツ
基本的性格	<ul style="list-style-type: none"> <li>・非生産的、消費的破滅的</li> <li>・労働の世界に対応しない</li> <li>・基本的に身体破滅的</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生産的、実利的</li> <li>・労働の世界に対応</li> <li>・身体形成的</li> </ul>

スポーツが、生産的価値に結びつかず、また身体破壊的（消費的）な傾向を持つ社会も存在することを我々は認識しなければならないように思われる。近代スポーツ以前のイギリスの「乱暴で危険な」フットボール<sup>(12)</sup>はそのひとつの例である。スポーツは、その起源においてハレの時空（非日常的空間）の存在であり、「聖なる部分」に密接に関係していた。「聖なる部分」の価値は、日常空間から遠去かれれば遠去かるほどその価値を持つ。つまり、スポーツも非生産的、蕩尽的であればあるほど「聖なる部分」に接触する可能性が生ずる。このような意味で、1984年のロサンゼルスオリンピックの開会式や閉会式は、スポーツが「聖なる部分」に接触する可能性を持っていることを象徴的に示していたように思われる。このような可能性は、南米のサッカーや甲子園の高校野球や熱狂的なプロ野球の応援風景などに発見することができる。

## 3. バタイユの視角からとらえた遊び論（「聖なる部分」＝その象徴としての<死>と現代のスポーツ）

「聖なる部分」への接触とは人間の消費プロセスを指す。最も「聖なる部分」に近づいた領域、すなわちバタイユの言う「至高性」の領域とは、日常的空間から最も遠去かった所を意味する。バタイユはその本質を次のように述べている。「損失を原則とするこれらのプロセスの根本的性格は、その形態は変わってもなんら変質をきたさない。一種の興奮が、様々な循環を通じてほぼ一定の水準に保たれ、集合体や個人を活気づけている。際立ったかたちのもとでは、その興奮状態は麻痺状態に似ており、合理的利用（収支均衡の原

理に応じた)も可能であったはずの物質的ないし精神的財産を投げ捨てる、支離滅烈な抑制不可能な衝動と規定してよい。<sup>(13)</sup> 過剰の捌口の一形態として遊びが存在すると規定すれば、遊びの中でも「際立ったもの」については次のような構造が見えてくる。

( 際立った )

遊び=蕩尽=「聖なる部分」への接触=その象徴的形態としての<死>

遊びによってもたらされる熱狂、興奮、生命の躍動感のかなたにバタイユは死の危険を見ている。同時に死の危険こそ、我々の遊びを限界づけるものであることを、秩序が遊びの本質的な属性であるとするホイジンガとは対照的に示している。バタイユは、「たわむれの魅力の限界は恐怖である。大事にし保存しておきたいという欲望が、わたしたちの内部で、滲透したいという欲望と拮抗関係にあるのだ。わたしたちだれしもの素朴な—そして秘められた—欲望は、生きながらえながら死に挑戦し、浪費しながら豊かになることである。<sup>(15)</sup>」と述べている。死に対する恐怖は遊びを限界づけるが、「際立った」遊びの形態においては「聖なる部分」への接触となることを説いている。「これらの条件のもとでは、死の危険は、たわむれの反対物であるどころか、まさに、わたしたちだれしも、利害の反対方向にできるだけ速くまで行きたいと望む生き方の意味である。それはけっして、ひどく遠いものではない。ただ、わたしたちが行きつく突端の地点は、まさしくたわむれが可能なものとしてありながら、最大の価値を有し、諸情念を最大限にあおりたてる地点である。<sup>(16)</sup>」

死の危険と遊びとの結びつきをバタイユは明らかにしたが、現代のスポーツ現象においてもこのような意味は失なわれてはいないであろう。特に高度な登山や高度な競技スポーツなど危険性を伴うスポーツはすべて大なり小なりこのような意味を持っていると言える。登山はこのことを最もあからさまな形で我々に認識させてくれる。より大きな危険を冒して、死に接近すればするほど、バタイユの考える遊びの原理に近づくことになる。エベレストで死んだ加藤保男氏やマッキンレーで死んだ植村直巳氏など現代の先鋭の登山家は、死に接近することで、生の充実をかみしめることをよく認識した人たちであると言えるだろう。

バタイユの理論に従えば、「なぜ山に登るのか」という命題に対して最も良く回答することができるだ

う。至高性という側面からとらえてみれば、より困難な登山であればあるほど、より死の危険が大きければ大きいほど価値ある行為となる。登山の世界には世界記録といったものは存在しないが、仮にそれぞれの登山の優劣をつけようとするれば、競技スポーツに類似した尺度が見えてくる。すなわち、決して山の高さによって優劣がつけられるのではなく、高度な登山ではどれだけ死の危険を冒したか、どれだけ困難なことを達成したかという尺度である。一般的な競技スポーツが、メートル、タイム、ポイントといった物質的な尺度を持つのに対し、高度な登山の場合には死の危険という象徴的な尺度が存在しているように思われる。ただし、この危険度とは登山者個人にとっての危険度ではない。初心者ばかりのパーティーにとっては冬山は危険なものであるが、ここでいう危険度とはある山の地形的、気象的な側面の絶対的な危険度である。

競技スポーツ、特に高度なレベルの競技場面ではよく「人間の可能性に挑戦する」といった表現が用いられるが、バタイユの視角からとらえるならば、一部のスポーツにおいては、「可能性への挑戦」を「死への挑戦」と置き換えることが可能な状況が、すでに出現しているように思われる。たとえば、体操競技では新しい技の開発に新型のマット(ビット)が導入されることによって安全に新しい技を習得できるようになったが、安全なのはあくまで練習場面だけであって、競技会ではそのマットが存在しない。つまり、体操の競技会、特に高度なレベルの競技会では、どれだけ高度で困難な技=死の危険性に選手が挑戦したかという尺度がすでに出現しているように思われる。この尺度は、先に述べた高度な登山における尺度と極めて良く似ているように思われる。

一般的なスポーツにおいては、これほど直接的な死の危険といったものは存在しないだろう。しかし、間接的にはいくつかこのような状況があるのではないだろうか。中長距離走などのゴール直前の苦しさなど身体的能力の限界直前の状況は、間接的に死の危険に接する機会ととらえることはできないだろうか。スポーツは、バタイユの言う死の危険に接する人間行動の多様な機構の一部分であるとみなすことはできないだろう。

個々のレベルにおいては以上のような考察が可能と思われるが、現代社会においてはむしろ集団レベルにおいて「聖なる部分」への接触をとらえた方が理解しやすいだろう。日本においては高校野球をとりまく熱

狂ぶり、南米においてはサッカーをとりまく熱狂ぶりなどに、バタイユの言う大量で集団的な過剰の消費を見い出すことができるように思われる。熱狂の度合いが高まれば高まるほど、そしてより多くの人々がより長期にわたって日常的空間からより遠去かれれば遠去かるほど、スポーツは「聖なる部分」に社会が接触する機能を果たすことになっていく。つまり、スポーツをとりまく社会現象が、ますます宗教的要素を数多く備えていくことになる。

近代社会においては、ポトラッチやローマ時代の見せ物のような破壊的、瀟灑的で大規模な、過剰の消費形態は否定されているが、その一方では過剰の消費形態として把握できる性風俗の氾濫、宗教の奢侈の形態（日本では新興宗教の巨大な施設群にその一例を見い出せるように思われる）が出現している。

このような状況において、スポーツは他の過剰の消費形態が否定された社会において、社会が公的に認められた過剰の消費のための一形態として、また大衆が「聖なる部分」に接触するための機能を持つものとしてとらえることができるように思われる。大衆にとってスポーツをとりまく熱狂は、近代社会の論理の中でスポーツに有用性という仮面をかぶせた上で真にハレの時間及び空間を産み出し、生の活力を取りもどす可能性を持つものとして機能しはじめていたのではないだろうか。

#### 4. バタイユの視角からとらえた競技の意味

バタイユの競技に関する考察は、ポトラッチの検討を中心に為されているが、ポトラッチについて彼は「いわば世界中のたわむれのあらゆる要素、あらゆる形体があい会しているといったものなのだ」<sup>(17)</sup>と述べている。ポトラッチのみならず様々な競技の原理を、バタイユは「贈与」とみている。遊びとしての競技は、「非生的価値の創造」であり、「至高な形で振舞うこと」である。ポトラッチにおいては、富の贈与より破壊の方がより華々しい、つまり至高な形で相手に卓越しているのであり、それによって「最も不条理で、かつ最も渴望をそそる」<sup>(18)</sup>榮譽を勝利者は手中にする。遊びにおいて「至高な」形で相手に卓越するということは、「有益性への心くばりを超越しているという心意気を証明する機会」<sup>(19)</sup>なのである。有益性という条件が入りこむことによって遊びは「十全ならざるたわむれ」と化す。すなわち「このたわむれは、つねにたわむれよりはるかに重要視されているまじめさの支配する生の営みのなかでの、くつろぎでしかない」<sup>(20)</sup>。非生産的

価値の創造こそ、「競争者にとっては、競って優越性を証拠だてる機会である」<sup>(21)</sup>と。バタイユの競技に関する考察は次の一筋でおおかた紹介できよう。

「ひとびとがこれ見よがしに競い合うのは、栄光のためであり、自分の属性である至高性のある状態を感じられるものとするためで、それは、自分の資力（あるいは、その一部）を、利益にはならない目的へと供することによって証拠だてられるものである。文学であろうと詩であろうと、歌であろうと踊りであろうと、徒競争であろうとサッカーであろうと、チェスであろうとトランプであろうと、また騎馬試合、ポトラッチ、さらに戦争であろうと、実技者たちは、自分の利害の巧みな運営に専念しているところを見せようとする心くばりを持ってはいはしなかつた。かれらが求めるものは、利害にかまけるやりぐりの目当てからははみ出ているものである。かれらが自分をひけらかすのは、たわむれているからであり、自分の力を理由もなく濫費しているからなのだ。かれらが確立しようとしている優越性は、競技者としての優越性である。それはつねにただむだに、さらに自分を浪費し、さらに自分の資産を贈与することにある。」<sup>(22)</sup>

バタイユの視角から見ると、現代スポーツにおいてもこのような側面が数多く見い出せるだろう。競技が富の贈与という原則にもとづいているとすれば、スポーツの世界における至高な形として肉体的破壊が存在するという仮説の可能性が存在する。つまり、最も鍛えられた人間、最も優れた競技選手が逆説的に最も肉体的に破壊された人間となる。ステロイド・ホルモンの副作用による肉体的破壊、スポーツ選手の事故、早死などこのような現象は数多く見い出されるだろう。ミッチェナーの「スポーツの危機」には、このような事例が数多く取り上げられている。バタイユ的視角からとらえるならば、明らかに競技スポーツの論理と健康を目的としたスポーツの論理が根本的に異なることがわかる。前者が無益性（その至高な形態としての肉体的配練）によって特徴づけられるとすれば後者は有益性によって特徴づけられる。また、前者を「十全なるたわむれ」とするならば後者は「十全ならざるたわむれ」ととらえることができる。ミッチェナーが警告した様々な事例は、ことごとくバタイユの見通した遊びの論理を裏書きするものとなっている。

#### 5. 今後の課題

バタイユの遊びに対する考え方は、ホイジンガのそれと

かなり類似していることがわかる。いくつかの相違点はあるにせよ、バタイユ自身「至高性とその真正なあらわれとの関係を、ホイジンガほどみごとに明示することはできない」と述べている。バタイユの論理は、<sup>(23)</sup>ホイジンガの思想の延長上にあり、ホイジンガを乗り越えるものとして注目すべきものである。事実、バタイユが見通した遊びの原則およびその諸特徴が、ミッチェナーが警告する事例にことごとく当てはまっている。たとえば、ミッチェナーはスポーツが人格形成に役立つという原則に疑問を投げかけているが、バタイユの視角から見ると、人格形成に役立つ社会もあれば、役立つ社会もないという結論を導き出せる。バタイユの視角は、有用性という側面からとらえられてきた様々なスポーツの神話を切り崩すひとつの手がかりとなるだろう。

最後に、今後の課題として強調したいのは、文化人類学的なアプローチからスポーツ・レクリエーションを把握する学問領域の可能性についてである。「スポーツ人類学」・「レクリエーション人類学」とも呼べるような学問領域の確立が可能なのではないだろうか。そのことによって、普遍的なスポーツ・レクリエーションの論理を明らかにすることが可能となるように思われる。

注

- (1) 栗本慎一郎 「幻想としての経済」 青土社 1980、「経済人類学」 東洋経済新報社 1979
- (2) ジョルジュ・バタイユ ジョルジュ・バタイユ著作集第6巻「呪われた部分」 生田耕作訳 二見書房 P24 ~ P25 1973
- (3) 前掲(2) P30
- (4) 前掲(2) P51
- (5) ジョルジュ・バタイユ ジョルジュ・バタイユ著作集第15巻「神秘／芸術／科学——社会科学論集2——」 山本功訳 二見書房 1973、本論では特にこの巻に所収された「わたしたちが存在しているのは、たわむれるためか、まじめであるためか」(P10~P53)という論文に着目した。他に、次の論述にも着目した。  
ジョルジュ・バタイユ ジョルジュ・バタイユ著作集第7巻「エロティシズム」 渋谷龍彦訳 二見書房 1973
- (6) 前掲(2)P281
- (7) P.C. マッキントッシュ 「スポーツと社会」 石川且・竹田清彦訳 不昧堂 P55 1970
- (8) A. グートマン「スポーツと現代アメリカ」 清水哲男訳 P115 1981

(9) このような視角からとらえるならば、スポーツの起源を決して労働の世界に求めることはできないだろう。

- (10) 前掲(2) P279
- (11) J・A・ミッチェナー 「スポーツの危機」 宮川毅訳 サイマル出版会 1976
- (12) 前掲(7) P51
- (13) 前掲(2) P288
- (14) 前掲(5)の訳者は、原語のJeu, Jouerを「たわむれ」「たわむれる」と訳している。
- (15) 前掲(5) P29
- (16) 前掲(5) P29
- (17) 前掲(5) P17~P18
- (18) 前掲(2) P288
- (19) 前掲(5) P20
- (20) 前掲(5) P37
- (21) 前掲(5) P20
- (22) 前掲(5) P20
- (23) 前掲(5) P17

## 補遺

本論はスポーツの起源論とかかわるものであるが、スポーツの起源に関する考察の過程において生じた問題を解決する過程において作成されたものである。その問題とは、スポーツの起源を求めていくと、基本的に2つの大きく隔っているように思われる考え方が存在するということである。すなわち、本能的な側面をスポーツの起源に求める動物学の一領域である比較行動学の考え方と、文化的な側面をスポーツの起源に求める文化人類学的な考え方である。本能的なものに起源を求める考え方としては、デズモンド・モリス、I・アイブル=アイバフェルトらの比較行動学者が掲げた考え方がある。彼らの基本的な視角は、「人間性は動物性の一つであってそれ以外の何者でもない」というものである。このことがスポーツにもあてはまるのではないかとする説である。この観点に立てば攻撃性、系統発生の適応（進化論）といった側面からスポーツに焦点をあてることが可能である。デズモンド・モリスは霊長類の適応能力そのものがスポーツの起源に結びついていると考えているように思われる。つまり、人類進化の過程で獲得された肉体的、精神的、行動能力-狩猟への適応能力-が農耕生活に始まる文明（環境）のあまりにも急激な変化についていくことができず、狩猟への適応能力の発現の場をスポーツの場面に求めているとする考えかたである。つまり、スポーツは過去人類の行動の代理行動であるとする考え方である。

また、I・アイブル=アイバフェルトは、動物のなわばり行動に着目し、「弱い方を完全に傷つけることなくどちらが強いかを確かめる」ための、つまり不必要な本物の闘争を防ぎ、攻撃性を無害な手段で転化させるための「儀式化」された行動について示しているが、これが何らかのかたちでスポーツの起源となっているのではないかとすることを示唆しているように思われる。

さて、このような行動学的解釈に対しバタイユの論述は文化的側面を強調しているように思われる。バタイユの視角からとらえるならば、競争の原理は贈与であり、その延長線上の至高なものとして瀕尽、破壊があることによって優越性が確立されるとして人間行動の非合理的側面に焦点を当てて考察しているが、一方の行動学者らは、むしろ合理的、自然科学的な側面から、競争の原理を不必要な闘争を防ぐための適応形態（アイブル=アイバフェルト）、あるいは狩猟の代理行動（モリス）とみている。これを埋め合わせるこ

とは困難であるように思われるが、可能性は残されているように思える。

行動学的観点からとらえてみると、バタイユのいう相手に卓越したいという欲望はなわばり行動における攻撃性の発現に結びついているのかもしれない。このような基本的な欲求（動物的欲求）が無意識の層、（進化論的観点に立てば大脳旧皮質、古皮質）あり、その上（大脳新皮質）に文化的な欲求が存在するのではないかという仮説の可能性が生じる。

バタイユが着目したいかんともしがたい人間の非合理的側面は文化的要因によってのみ規定されるものではないように思われる。アイブル=アイバフェルトも次のような論述において人間性の不合理を指摘している。

「行動をうながすわれわれの衝動のいくつかは、現代では社会生活を阻害する働きをする結果になっている。攻撃の衝動もそうで、これは高等な脊椎動物では重要な役割を果たしているのに、現代の人間の社会生活の中ではその本来の意味の多くを失ってしまっているのである。いや、攻撃の衝動は明らかに危険の源にすらなっているのだ。というのは、内部の動因はこの衝動を放散するようにと人間に迫るのに他方、社会の内部にはそのための適当な可能性が必ずしも存在しないからである。」（「愛と憎しみ」、みすず書房、1974、P38）

バタイユの「非合理的な消費」はアイブル=アイバフェルトの攻撃性の放散と深く結びついているように思われる。このような点にこそバタイユ的視角と行動学的視角の克服しがたい溝を埋め合わせる何らかの手がかりがあるようだが、その手がかりのひとつとしてスポーツおよびレクリエーションの人類学的な研究があげられるように思われる。